



《報告・資料》

札幌の失われた川を尋ねて—「水の都」札幌—

宮坂省吾^{1)†}

Visit for lost streams in Sapporo—“a City of Water”, Sapporo—

Seigo Miyasaka^{1)†}

2017 年 10 月 26 日受付

2017 年 11 月 9 日受理

¹⁾ 北海道総合地質学研究センター

Hokkaido Research Center of Geology

連絡先：札幌市東区中沼町 29 番地 283

Nakanuma-chou 29-283, Higasi-ku, Sapporo

004-0064, Japan

† Corresponding author: miyasaka@hrcg.jp

(概要)

本稿は、2017 年 10 月 13 日に北海道教育委員会主催道民カレッジ連携講座「失われた川を歩く」での配布資料を整理したものである。

いまから 150 年前に開拓使が札幌を開いたころの風景を地図や絵図から探り、明治～大正期に残された写真や回顧に基づいて失われた川と「水の都」の復元を試みた。

はじめに

150 年ほど前、開拓使が本府を札幌に構えた頃、川があちこちに流れ、その間に明るい林が繁っていた。開拓使は豊平川を利用した開発を進めるとともに、メム〔湧泉池〕¹を生かして「偕楽園」を作ったほか、北大植物園から北大構内にかけて農園などとして、自然を残した。

道民カレッジ連携講座では、このようにして残された自然景観について、写真や絵で説明した。

資料の使用および掲載を許可していただいた北海道大学の附属図書館、大学文書館、植物園・博物館と札幌市公文書館に感謝する。

「水の都」札幌

開拓使は 1869 (明治 2) 年の暮れに札幌本府の建設を始めたが、明けた冬の終わりころの風景が残されている (第 1 図)。その時、円山や藻岩山が朝日を浴び、いまは失われたフシコ川が流れていた。川のほとりには本府が置かれて家並みが建ち始め、一足早く開かれた札幌村が見えている。

開拓使は水の公園「偕楽園」のほか本府建設に川や泉を多岐にわたって利用し、創成川を舟運、川筋を街の用水、水力を動力とする木材加

¹ アイヌ語地名は山田秀三 (1965) に準拠した。アイヌ語表記はカタカナに続けて和訳を〔 〕内に示した。川名はアイヌ語地名に「川」を付し、分かりやすくした。



第 1 図. 1870 (明治 3) 年の札幌 (恵曾谷日誌 : 北海道大学附属図書館). 北から南を見て鳥瞰図として描いている. 図中の「札幌府」は開拓使の札幌本府, 「札幌在」は札幌村のことである. 右側の山は円山, 左側の山は藻岩山.

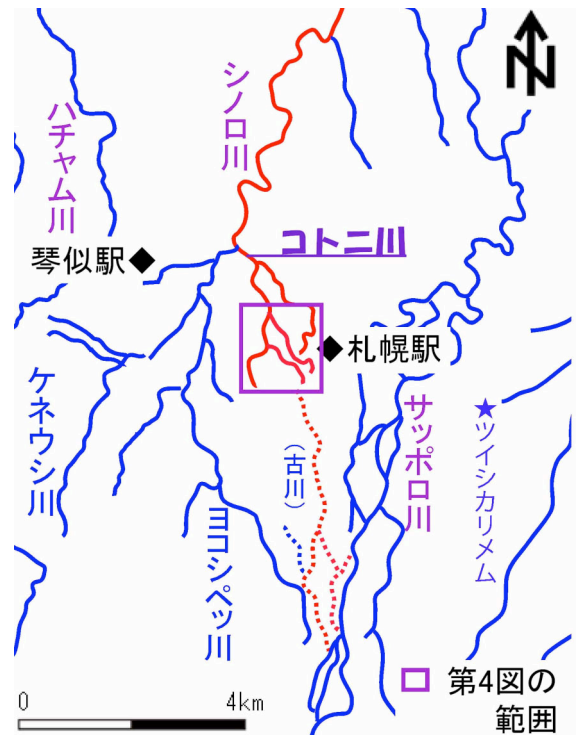


第 2 図. 1873 (明治 6) 年の札幌 (札幌市街之真景. 船越長善 : 北海道大学植物園・博物館). 東から西を見て鳥瞰図として描いている. 左下に豊平川, 山並の右端に手稲山, その左下に三角山, 並んで左に円山, 左側は藻岩山である. 左端はるかに恵庭岳. 豊平川扇状地 (札幌面) に関かれた札幌本府と周囲に広がる自然の姿が描かれている.

工や製粉などに用いた. このようにして, 川や豊富な水が開拓使の仕事を支え, 「水の都」が形成されていった.

しかし, 第 2 図のように本府の発展は地形の一部を変え, 農地開拓や橋梁・堤防の建設が進むとともに, 川は姿を変えただけでなく多くは姿を消し, メムもしだいに涸れていった.

札幌の祖先河川と都心の清流



第 3 図. 18 世紀以前の札幌の川 (祖先河川). 川筋は 5 万分の 1 地形図『札幌』明治 29 年版による. 古川と付した破線の川筋は『札幌の自然を歩く 第 2 版』によった.

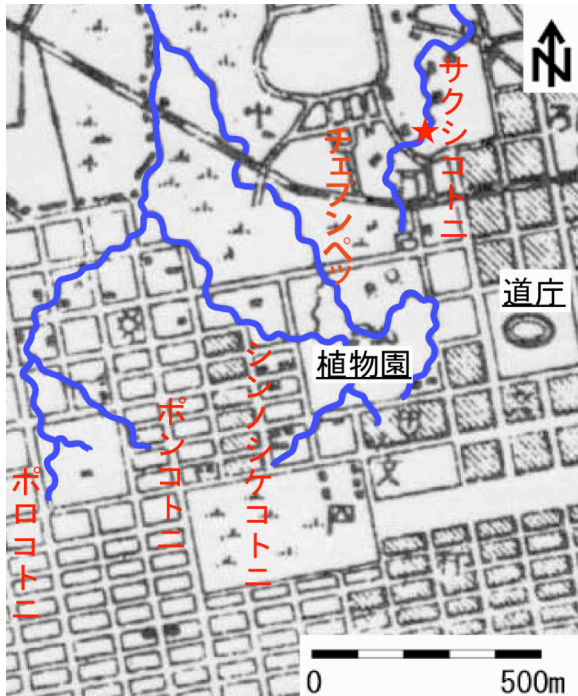
私はこれまでの知見を整理して, 札幌の祖先河川と言える古い川筋を復元してみた. 今回の講座では, 札幌本府に関連するコトニ川について説明した (第 3 図).

開拓使本庁から西の一帯は, アイヌの人たちにコッネイ [凹地になっているところ] と呼ばれていた. コツ [凹地] はメムを指しており, そこから北へ流れていた川がコトニ川²であった. 清流コトニ川とその支流のアイヌ語名と意味は次のように整理される (第 4 図).

- ・ポロコトニ [大きいコトニ川]
- ・ポンコトニ [小さいコトニ川]
- ・シンノシケコトニ [まんなかのコトニ川]
- ・チェブンペツ [魚が入る川]
- ・サクシコトニ³ [川に近い方を流れるコトニ川]

² 開拓使はその名をケネウシ川 [ハンノキの群生する川] のほitoriへ移転し, そこを琴似村とした. ケネウシ川も「琴似川」と改称された.

³ サクシコトニのシは子音のシsでシュ sh ではないとされるので, サクシコトニと表記する.



第4図. 1896 (明治29) 年の都心の川 (5万分の1地形図『札幌』明治29年版: 国土地理院).
★: 借楽園

これらのうち、今回はサクシコトニ川、チェブペン川、シンノシケコトニ川を尋ねてみる。

この頃、札幌本府の東にはいまの豊平川から伏籠川へと流れるサッポロ川があった。川名の由来はサッポロペッ [乾いた大きい川] で、洪水が引くと広い石川原が現れた景観であると推論されている。サッポロ川は1800年頃にツイシカリ川を併合し、東へ流路を替えた⁴ (第3図)。しかし、古い北への流れは残り、僅かながら伏籠川へもつながっていた。

1. サクシコトニ川を尋ねる

北大構内を流れるサクシコトニ川はヌブサムメム [野の傍らの湧泉池] から流れだして、北大の北西端付近でコトニ川の本流に合流していた。アイヌ語地名のサ [川に近い方] とはサッポロ川⁵を指しており、コトニ川のうちサッポロ川にもっとも近い川だったことを示している。

⁴ サッポロ川から切り離された下流は、フシコサッポロペッ [古いサッポロ川] と呼ばれるようになっていた (現在の伏籠川)。

⁵ サッポロ川の名称は、後に開拓使によって豊平川と改名された。



第5図. サクシコトニ川脇に残る河原の地形。奥の建物は北大弓道場。川の左側の緩斜面はポイント・バー (寄洲) と見られる。

1) 北大構内のサクシコトニ川

北大構内は開拓使によって農園とされたほか、札幌市の河川に指定されたことによって、自然の地形が残された。ここでは、1903 (明治36) 年に札幌農学校が移転してきてから撮影された写真で川の風景を追ってみる。

a. 大きな川の地形

総合博物館の東にある弓道場は、扇状地面より一段低いところに建てられている。そこを下流側から見ると、川は左へカーブし、左の高台から右の方に低くなり、流れは右岸に当たっている (第5図)。この低くなったところはポイント・バー (寄洲) と呼ばれる古い川跡で、幅は20 m 近くもある。

河原には河畔林が成立しており、洪水の痕跡も認められないので、河原の形成時期はかなり古いものと思われる。このような規模と古さから、この大きな川はサッポロ川の分流であったと考えられる。

b. 小川と化したサッポロ川分流

中央図書館のあたりでも、扇状地面から2 m ほど下がったところに、分流が作ったと考えられる川幅20 m 近い河原がある。しかし、学生たちが立っている小川は幅3 m ほどで、大きな川ではなくなっている (第6図)。サッポロ川の分流が河道を変更したため上流を断たれて、古い大きな川から小川への変化が起ったと考えられる。この小川は、メムと呼ばれる扇端湧泉⁶が作ったと考えられている。

c. 扇状地 (元の第2農場) 脇の川と泉

環境科学院が建っているところは、農学校

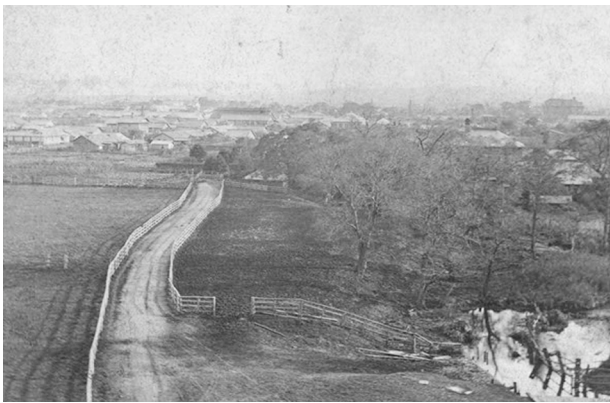
⁶ 扇状地の末端 (扇端) 域の湧泉のこと。



第 6 図. 昭和 10 年代 (1935-1945) のサクシコトニ川: 北海道大学大学文書館. 学生たちの立っているところはメムから流れでる小川の氾濫原である. 左側の一段高い低地が古い大きな川の跡. 右端の高台は扇状地面である.



第 8 図. 1899 (明治 32) 年の農場事務所脇の湧水: 北海道大学附属図書館. 扇状地に立つ農場事務所 (正面の建物) の脇から, 湧水が小川となって流れでている.



第 7 図. 1897 (明治 30) 年頃, モデルバーン屋上から札幌市街を望む: 北海道大学附属図書館. 写真奥の札幌市街から現北大事務局にかけて広がる扇状地. 写真右下にサクシコトニ川の水面が見える.



第 9 図. サクシコトニ川脇の湧水跡 (左に北大附属図書館. 右に百年記念会館). 第 8 図の小さな池を逆向きに撮影した. 当時の自然の湧水量の方が今よりずっと多い.

の第 2 農場の一部だった. そこは札幌市街から続く一連の扇状地面で, サクシコトニ川が低地を流れ河畔に木陰を作っていた (第 7 図). その少し上流 (百年記念会館の前) には, 扇状地から湧き出るメムを思わせる湧水があった (第 8 図).

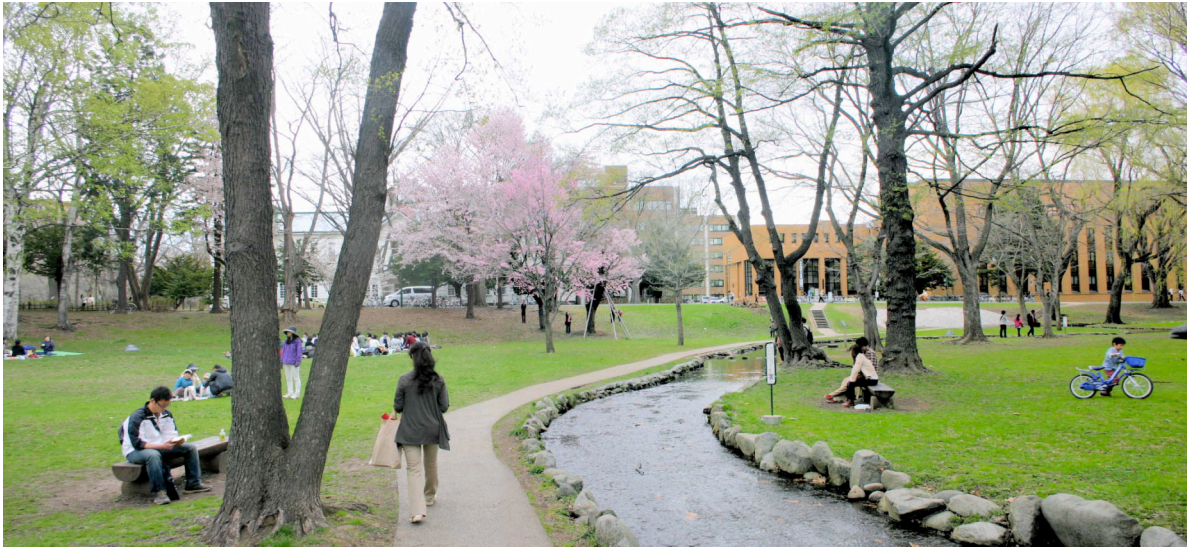
かつては, 第 2 農場に放牧された牛が, この池で頭を寄せ合いながら水を飲んでいた. いま水は枯れているが, 人工湧水によって泉が復元され百年記念会館前の池となっている (第 9 図).

d. 中央ローンは大きな川の跡

サッポロ川の分流だったころのサクシコトニ川は, 大雨や融雪洪水の時にはローンいっぱい川が流れ, さらに高台にも洪水が溢れ

て砂や泥を堆積していた. 近くの遺跡発掘の際に, その地層が現れていたと報告されている. これらから, ローンの低地が大きな川跡だったことが分かる (第 10 図). メムから流れでる小川となってからも, 大正時代までは遡上してきたサケが手づかみで取れ, 確かな目撃情報は 1931 (昭和 6) 年の産卵後のサケ「ホッチャレ」だったと言う. そのころのサクシコトニ川の流路は, 第 11 図のようであった.

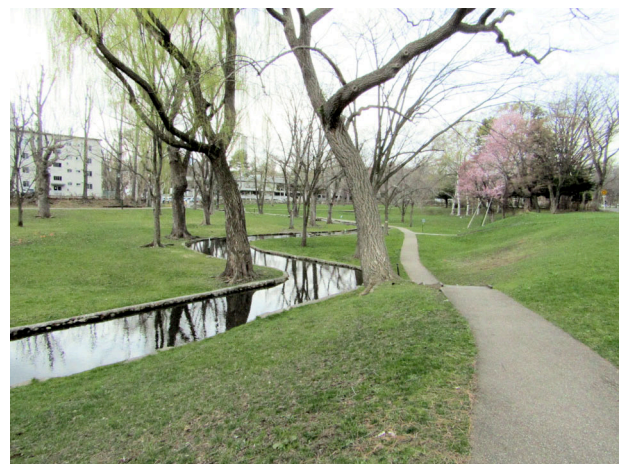
1951 (昭和 26) 年頃に, 上流域の都市化の影響か, メムとともに川は涸れてしまい, 中央ローンに流れのない時代が続いたが, それから 50 年ほど過ぎた 2003 (平成 15) 年に札幌市藻岩浄水場から水を引いて川を復活させた (第



第 10 図. 北大中央ローンはサップロ川分流の河原の跡. 南（上流）から見た古い大きい川の跡で、サクラの咲く斜面（河岸）から右は古川の跡（氾濫原）である.



第 11 図. 1933（昭和 8）年の中央ローン：北海道大学附属図書館. この頃まで、このあたりまでサケが上がってきていた.



第 12 図. 中央ローンに復活したサクシコトニ川（第 11 図の少し上流）. 左右の高台（扇状地面）の間の広い低地を流れる古い大きい川の跡で、その中に復活したサクシコトニ川がある.

12 図).

e. 大川が育てたハルニレ林

扇状地面に作られた農学校の運動場の脇に、古いハルニレが並木のように残されていた。いまは、その後に建てられた旧理学部（総合博物館）の前にそびえて、威風堂々と守り神を任じているように見える（第 13 図）。総合博物館南のハルニレ林には樹齢 190 年のものがあって、その切株が博物館に展示されている。計算をしてみると、発芽は江戸時代後期の 1810 年くらいになる。私も、博物館の南で切株の年輪を測ってみた（第 14 図）。半径は 80 cm ほどで、内部の 10 cm ほどは空洞だが、年輪 150 を数えた。補正計算で推定すると樹齢 171 年となり、

1830 年生まれと考えられる。これらから、このエルムの森は 19 世紀の前半に更新され、成立したことが分かる。

辻井達一は「エルムは肥えた土と十分な水と、そして十分な排水とを必要とする」と言っている。そのような条件を満たす地形は、川の付近の高台で、時には氾濫を被るところがふさわしいと思われる。

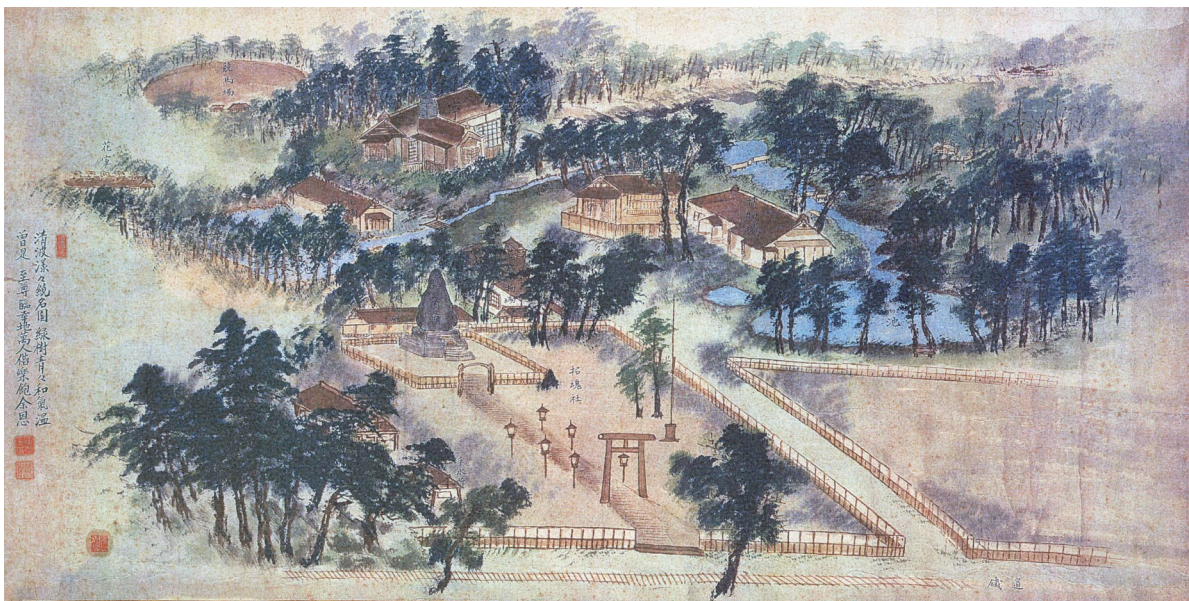
そこから考えると、サクシコトニ川が大河の時代にハルニレを主とする樹林が成立していたと言えるのかもしれない。その後、メムから流れでる小川になってからも、豊かな流量が成長を支えていたことであろう。サケが産卵に現



第 13 図. 農学校運動場の脇に残されたハルニレの列. 建物は北大総合博物館で、北大出版会の建物(旧図書館)裏までが農学校の運動場であった.



第 14 図. 総合博物館南のハルニレ林と切株の年輪. ここの運動場の跡と思われるが、古いハルニレがあちこちに残っていた.



第 15 図. 1882 (明治 15) 年の偕楽園: 札幌市公文書館. 中央に博物場, 左奥に清華亭, 左側に孵化場, 右上にアイヌの家々. 写真下に左右に走る鉄道 (当時の空知通).

れていた頃、ハルニレも豊かな水を楽々と吸い上げることができ、「水の都」の主役を張っていたのだ.

2) 扇状地の傍らのメム

北海道庁の北西にヌプサムメム〔野の傍らの湧泉池〕と呼ばれた大きな泉があった. 「野」とは、高台をなす扇状地面のことで、その畔には和名を琴似又市とされた方の家族が住んでいたサクシコトニコタン⁷があった (第 15 図

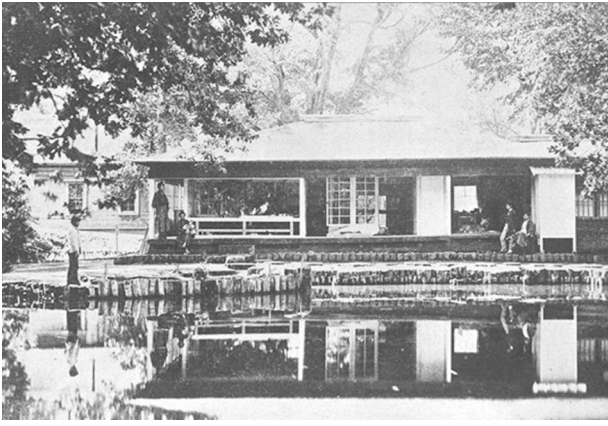
右上) .

a. 最初の公園「偕楽園」

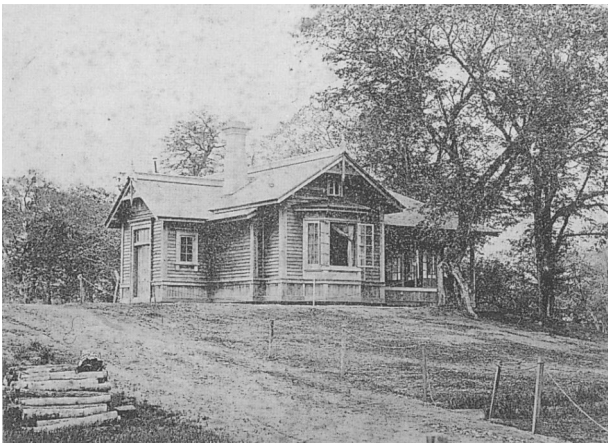
1871 (明治 4) 年、「庶民と偕に楽しむ公園」として偕楽園が開設されたとき、あたりは、原生林に覆われ、水が湧き、サクシコトニ川が流れる自然郷であったと言われる. 一帯は開拓使の勸業施設として開かれ、中央に博物場 (第 16 図), 上流側に孵化場が併設されていた. 優雅な造りの博物場がメムに映った風景には、目を見張る.

このように、偕楽園は「水の都・札幌」の第一幕にふさわしいところだった.

⁷ コタン [村] は一時的にでも家があるところのことである. こは、コトニコタンとも言われる.



第 16 図. 開拓使仮博物館：北海道大学附属図書館. 手前の水面はメムから湧き出た池である.



第 17 図. 1880 (明治 13) 年の清華亭 (南西面) : 北海道大学附属図書館. 建物は完成しているが、植樹を含めた庭園造りは始まっていない. この後、左の道沿いにヨーロッパクロマツが植えられた. 右端の広葉樹は、いまに残るハルニレであろう.

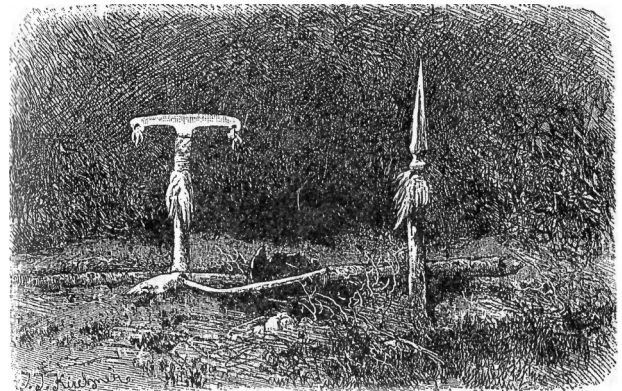
b. 扇状地に立つ清華亭

明治天皇を迎えるため、開拓使は偕楽園の整備をさらに進め、行在所としての豊平館も着工した. 偕楽園の休憩所 (第 17 図) は 1880 (明治 13) 年に完成し、黒田長官が「水木清華亭」と命名した.

清華亭は、メム周辺の低地から 2 m ほど高い扇状地面に立地している (第 18 図 [上]). 建築当時はメムやサクシコトニ川の流れが目の前にあり、東には若いハルニレが覗いていたと思われる. 1881 (明治 14) 年に開拓使を訪れた明治天皇は、前年に完成した清華亭からの眺望を絶賛した. 若く清々しい風情が心を和ませ



第 18 図. 清華亭の今昔. [上] は 1883 (明治 16) 年の清華亭 (偕楽園図: 札幌市公文書館), [下] は 2015 年夏の南面. 清華亭の西面と南面に、背丈の低い植樹がなされたことが分かる. その右にサクシコトニの小川が見える. [上] 右手の在来樹が [下] 右のハルニレ老樹に相当する.



第 19 図. アイヌの墓 (東洋紀行 1. G・クライトナー. 東洋文庫 555, 平凡社).

るものだったのであろう.

c. コタンとその墓

1878 (明治 11) 年に、清華亭の建設に携わっていた「造園の大家」ルイス・ベーマーによって、サクシコトニコタンの墓が発見されていた. G.クライトナーは、彼の案内で現地を歩き、墓の観察記録とともにスケッチを残した (第 19 図). 彼の記述「高台となった沼沢の中央部に二基の墓があった」から、そこは清華亭より西へ延びる高台だったのではなかったかと、私は思っている.



第 20 図. 琴似又市の肖像：北海道大学附属図書館. 前列中央が琴似又市氏である.



第 21 図. 1889 (明治 32) 年頃, 偕楽亭の景：北海道大学附属図書館. 第 18 図 [上] の中央下の孵化場の池に移設したらしい. 伊藤邸のメムから流れでたサクシコトニ川の水を止めて造ったものだろう.

そのコタンの長だった琴似又市は (第 20 図), モニオマと呼ばれた上サッポロコタンの長らとともに「札幌の事実上の最初の市民」と言っ
てしかるべきだろうと, 山田秀三は述べている.

d. 料亭の華やぐ地に

1880 年に鉄道が開通して偕楽園は本庁から隔てられ, その 6 年後に北海道庁は官業的公園を廃止し, 付近にあった開拓記念碑や競馬場も移されてしまった. 寂れる一方の偕楽園は, 開拓に功のあった対馬嘉三郎に払下られた. そこに博物場を改造して造られた「弦歌さんざめく偕楽亭」が出現し, 大変な賑わいで華やいでいた (第 21 図).

e. 荒廃から救われた清華亭

しばらくのあいだ「幌都の西北幽すい閑雅の



第 22 図. 清華亭入口に植えられたヨーロッパクロマツ.

処」であった偕楽亭も, 東の上島正のしょうぶ園, 中島公園の岡田花園に人々の会席を奪われ, 閉店してしまう. 清華亭付近は個人の所有になって, 池の周囲は塵捨場となり, 周辺には住宅・貸家などや市場が設けられて雑然たる“偕楽町”となったと, 大山黙笑は描写した. その荒廃を歴史家河野常吉, 北大総長佐藤昌介, 札幌市長橋本正治たちの「清華亭保存運動」が救う.

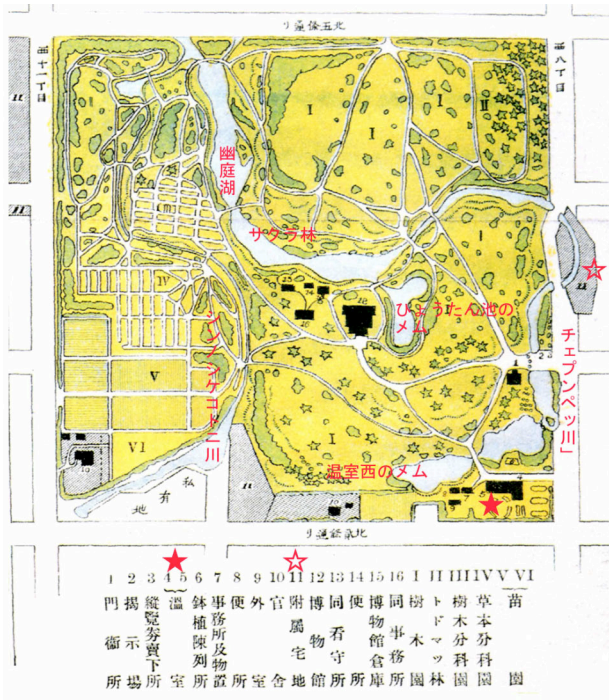
河野は「永く保存すべき史蹟であるばかりでなく, 風致上も大切. 開拓使時代の建物も残すべきである.」と論陣を張った. この運動は実り, 1933 年に史蹟に指定され保存の基礎が築かれた. 河野は, それを待たずに, 清華亭 50 年の祭りの夜, 五段雷の花火がとどろいた後, 息を引き取った.

f. 清華亭のいま

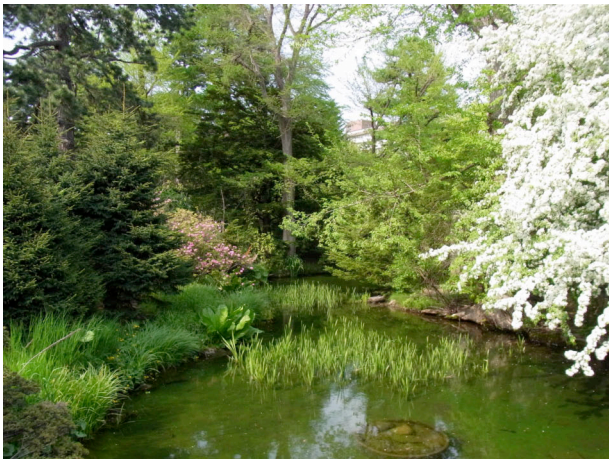
清華亭の入口 (西) と正面 (南) に植樹がなされ, 東と北には在来の木を残していた (第 15 図). いま清華亭の東にそびえるハルニレ (第 18 図 [下] の右) は在来樹の一つと思われ, 135 年にわたって偕楽園を見守ってきたと言える. そして, 入口への通路にはベーマー植樹のヨーロッパクロマツがそびえたち, 訪問者を迎えている (第 22 図).

g. ヌプサムメム再考

山田秀三は, 伊藤亀太郎の邸宅 (伊藤邸) のメムも, ヌプサムメムの一部であったかも知れないと考えていた. 地形を見ると, 偕楽園からこのあたりにかけては, 扇状地面が広がって「野」をなしており, 傍らにある窪地から水が湧きでてメムとなり, そこから川となって流れだしていたと, 考えられる.



第 23 図. 1918 (大正 7) 年の植物園 : 北海道大学植物園・博物館。水色は川、緑は樹木。☆ : 附属宅地, ☆ : 温室。



第 24 図. 温室西のメム : 石井正之氏提供。

なかでも偕楽園のメムは北側にサクシコトニ川の河原が広がっていて、「野の傍らに湧泉池がある」という表現にふさわしい。そこにサケが上がり、アイヌのコタンが築かれていた。その時代も、ここは「水の都」だったと思われる。

2. 植物園のメムと川を尋ねる

北大植物園は、豊平川の扇状地面に開拓使の牧羊場や博物館とともに札幌農学校植物園として設立された (第 23 図)。植物園は「天然の風致を保存」することを基本方針にしたことに



第 25 図. 植物園の幽庭湖 : 北海道大学附属図書館。第 23 図の「幽庭湖」と付したあたりから南東方向を写したもので、正面の低地が現在のサクラ林と思われる。

より、メムはチェブンペツ川やシンノシケコトニ川などの地形とともに保存されることになった。

また、扇状地面に残っている 1000 年ほど前の竪穴式住居跡は、ここの地形と川がすでにできあがり、日々の糧を獲得できるようになっていたことを示すものである。

1) 植物園のメム

ピシクシメム [サッポロ川のほうの湧泉池] では、第 23 図の中央右下の温室の西側や、中央右寄りのひょうたん池などが、おもな湧泉であったと思われる。「明治時代の中頃、川の水は冷たく夏でも足が赤くなるほど」、「明治 33 年頃、川は綺麗で、アイヌの家が 2 軒ほどあった」と古い情景が書き残されている。

温室西のメム (第 24 図) から流れだした川は、正門のすぐ北で東へ曲流していた。その曲流部を附属宅地 (第 23 図の☆) として、道路 (西 8 丁目通) を西へ曲げて迂回した。このような自然の川の流れを残す気配りには、敬意を表わしたいと思う。

そうして残された川は、下流の植物園中央部で川幅 20~30 m もある「幽庭湖」を作って景勝地の一つとなった (第 25 図)。兩岸の氾濫原には、うっそうとした樹林が形成されていて、「水の都」を浮き立たせていた。ここで、小舟に乗って遊んだ人たちを羨むばかりである。

さて、メムの湧水は昭和時代の初期には涸れていたらしく、後に一日 6 百㍓の水を揚げても



第 26 図. 植物園のサクラ林はサッポロ川分流の跡. 写真左 (右岸) の斜面は河岸地形で, 左岸河岸は右端にあるが木の陰になっている. この幅広い低地が, 大きかった川の跡である.

途中ですべて抜けてしまったと, 植物園長だった辻井達一は語った. その対策に道庁の水を回して貰って凌いだが, 水量が足りなかったせいか小さな湿原を残すばかりと化した. いま, 「湿生園」と呼ばれる新しい風景が育っている.

2) 植物園の川

植物園のメムから流れだす川はチェブンペッ川と呼ばれ, 西のコトニ川本流 (ポロコトニ) に入っていた. これらの川も, 古くはサッポロ川からの分流であったと考えられる. 植物園の中央部にあるサクラ林は幅 100 m ほどの分流跡の低地 (幽庭湖の河畔林) で, 第 26 図の右端が幽庭湖にあたる流路である.

チェブンペッを古名とするこの川には, もう一つの名前「セロンペッ」があった. 松前藩の番人がサケを蒸籠に入れて塩鮭を作ったことから名づけられたと, 永田方正が書き残している. 和人の「蒸籠川」が, アイヌ語の「セロンペッ」になったというわけだ. このような地名は, 松前藩が管理人を派遣するほど大量のサケが獲れた川だったことを物語る.

1873 (明治 6) 年の『札幌郡西部図』には, この川とコトニ川本流の合流点付近にアイヌ家屋が 3 軒と書かれている. 「コトニ」コタンとも呼べるサクシコトニコタンとは別の村がここにあったのかもしれない.

3) 植物園のもう一つの川

植物園の西側に, 第 23 図では不明瞭だが, もう一つの川「シンノシケコトニ川」が流れていた. 3 本のコトニ川の真中 (コトニ川とチェ

ブンペッ川の間) の川のことである. この川は, 旧札幌市立病院の南や旧大通小学校付近の小さなメムを源流として, 植物園を過ぎて北西に流れ, コトニ川と合流していた.

第 4 図を見ると, この川はチェブンペッ川とつながっているように見える. 扇状地の川なので, 洪水によって流路が切り替わったり, 絡み合いながら流れていたことを示すのかもしれない.

お わ り に

都市の建設は自然を壊して進められ, 自然が変われば地名も替わっていく. 札幌で 150 年前に始まった開拓は, アイヌの人たちの生活を奪ったうえ, 川も失くしてしまった. 山田秀三のアイヌ語地名を尋ねる仕事は, そのような失われた自然への回帰の旅だったと, 筆者は感じている.

その思いに触れようと思い立って, 資料や写真を集めて, 少し考えてきた. 歴史の深いところに理解が進んだ訳ではないが, その風景の成り立ちが見えてきたようである.

次は, サッポロ川, ハッサム川, ツイシカリ川などの祖先河川の姿を整理してみたいと思っている.

参 考 文 献

(本稿では文章が煩雑になることを避けるために, 文献の引用を明記しなかったが, 執筆にあたって, 以下の文献を参考にした.)

- G・クライトナー, 1992, 東洋紀行 1. 東洋文庫 555, 平凡社 (大林太良監修・小谷裕幸・森田明訳), 358p.
- 飯嶋矩道・船越長善, 1873, 「札幌郡西部図」. 北海道立図書館所蔵.
- 岩沢健蔵, 1986, 北大歴史散歩. 北海道大学出版会, 214p.
- 永田方正, 1892, 北海道蝦夷語地名解. 国書刊行会, 1972 (復刻), 498p.
- 大山黙笑, 1927, さっぽろの昔話 大正編. みやま書房, 1978 (復刻), 164p.
- 札幌市教育委員会, 1980, 豊平館・清華亭. さっぽろ文庫 15, 札幌市, 314p.
- 山田秀三, 1964, 札幌のアイヌ地名を尋ねて. 楡書房, 176p.